

症例報告

創傷部蠅蛆症の1 経験

南本 俊之* 大石 佳織** 和田真由美**
長田 敬子** 石川 耕資*** 林 利彦***

A Case of Wound Myiasis

Toshiyuki MINAMIMOTO, Kaori OISHI, Mayumi WADA
Keiko NAGATA, Kosuke ISHIKAWA, Toshihiko HAYASHI

Key words : Wound Myiasis

要 旨

症例は70歳男性で、右下腿難治性潰瘍にて外来フォロー中に、その創部に蛆が群がっている場合に遭遇した。創傷部蠅蛆症はハエが生息する環境下で開放創が放置された場合にみられ、社会経済的に劣悪な状況下や、精神障害や自己ネグレクトなどがあると生じることがある。本症例ではゴミ屋敷で起居する環境要因とそれを許容している精神状態に因るところが大きいと思われた。

はじめに

創傷部蠅蛆症はハエが生息する環境で開放創が放置された場合にみられ、社会経済的に劣悪な状況下や、精神障害や自己ネグレクトなどがあると生じることがある。今回当科で経験した創傷部蠅蛆症に関し文献的考察を加えて報告する。

症 例

症例：70歳男性

主訴：右下腿難治性潰瘍

現病歴：両側の難治性下腿潰瘍で保存的治療を受けていた。左下腿は治癒したが、右下腿の傷が治癒に至らず、また、生活歴より精神疾患の合併も考えられたので、精神神経科が併設されている当院に紹介された。

既往歴：腰痛症

初診時現症：右足背と右脛骨前面に壊死組織のついたやや大きい皮膚潰瘍を認めた（図1 a, b）。右外顆と右踵部にも小潰瘍を認めた。

初診時のエピソード：汚れた衣服を身にまとい、市の福祉担当の方と一緒に受診された。生活状況を聴取すると、独居で、住んでいる家はゴミに埋もれている、ゴミ屋敷とのことであった。診察時の受け答えでは特に異常な点は認められなかった。

治療方針：週1回の外来に来ていただき、創を洗浄して保存的に経過をみていくこととした。

精神神経科にこの患者のことを相談したところ、精神疾患ではなく、性格異常が考えられるということで、同科の受診は見合わせた。



図1 当科初診時の創面の状況

a：右足背

b：右脛骨前面

*市立函館病院 形成外科

**市立函館病院 看護局外来6ブロック

***北海道大学病院 形成外科

〒041-8680 函館市港町1-10-1 南本 俊之

受付日：2019年5月7日 受理日：2019年6月10日

治療経過：

当初は通院を延ばし延ばしにしようとしたこともあったが、なんとか週1回の外来診療を継続した。潰瘍は悪化することもなく、徐々に小さくなっていった。

1回目の蛆の確認：

外来治療を始めてから2年3ヶ月が経過した時、創を洗浄するためにとった包帯より2匹の蛆を確認した(図2)。この2匹以外の虫体は探した限りでは発見できなかった。創面には蛆はおらず、この2匹が創部のどこに付着していたのかは不明であったが、虫体確認の一週間前(図3a)と一週間後(図3c)の臨床写真を比較すると、脛骨前面の壊死組織のとれ方が著しく、ここについていたことが強く示唆された(図3b)。

その後も診察時に注意して観察したが、新たな蛆は発見できず経過した。

2回目の蛆の確認：

外来治療を始めてから3年1ヶ月が経過した時、右外頰の小潰瘍におびただしい数の蛆が付着していた(図4a, b)。蛆による創の変化をためみるために、前後の臨床写真(図5a, c)を比較すると、表面を覆っていた光沢のあるバイオフィルムと思われるものが除去されていることが確認できた(図5a, b, c)。



図2 創面に付着していたと推定される蛆(初診より2年3ヶ月後)



図3 最初に蛆が付着していたと思われる脛骨前面の創面
a: 蛆の付着する1週間前
b: 蛆が付着していた日
c: 蛆が付着していた1週間後

このような状況を生み出している生活環境を改善するために行政に働きかけて、ゴミ屋敷となっているご自宅の清掃を行ってもらうこととなった。

その後も外来で創洗浄を継続した。外来治療を始めてから3年6ヶ月経過した時に鎖骨骨折と恥骨骨折を患われ、紹介元の病院で加療することとなり、当院での治療は終了となった。

当院での終診時の臨床写真をみると、右足背部の潰瘍は縮小したが浅いものが残ったこと、脛骨前面の潰瘍は上皮化を果たしたこと(図6a, b)、さらに右外頰部と右踵部の潰瘍は縮小したことが確認できた。

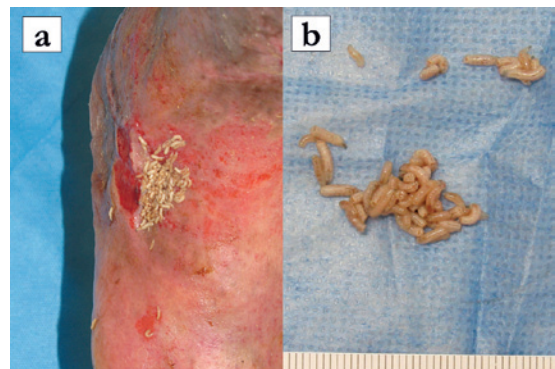


図4 2回目に蛆が付着していた右外頰部の創面
a: 右外頰部に無数の蛆が付着していた
b: 創面から採取された蛆

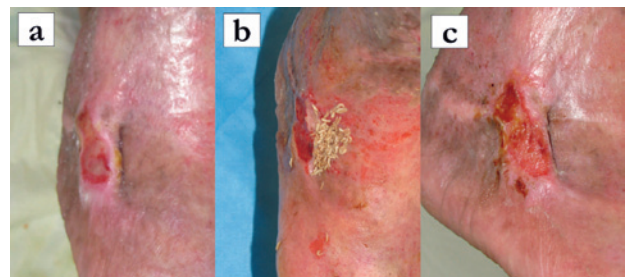


図5 外頰部の創面の状況の変化
a: 蛆の付着する2週間前
b: 蛆が付着していた日
c: 蛆が付着していた1週間後



図6 当科最終診察時の創面の状況
a: 右足背
b: 右脛骨前面

表1 ICD-10による蠅蛆症の分類 (文献2より引用し邦語訳をつけた)

B87 Myiasis	蠅蛆症
Incl. : Infestation by larvae of flies	ハエの幼虫の寄生を含む
B87.0 Cutaneous myiasis	皮膚蠅蛆症
Creeping myiasis	ウジが皮膚表面を這い回っている場合
B87.1 Wound myiasis	創傷部蠅蛆症
Traumatic myiasis	外傷性蠅蛆症
B87.2 Ocular myiasis	眼蠅蛆症
B87.3 Nasopharyngeal myiasis	鼻咽頭蠅蛆症
Laryngeal myiasis	喉頭蠅蛆症
B87.4 Aural myiasis	耳蠅蛆症
B87.8 Myiasis of other sites	その他の部位の蠅蛆症
Genitourinary myiasis	泌尿生殖器蠅蛆症
Intestinal myiasis	消化管蠅蛆症
B87.9 Myiasis, unspecified	詳細不明の蠅蛆症

考察・まとめ

人や動物の体に蛆が巣食う病態を蠅蛆症もしくはハエ幼虫症といい、本論文では蠅蛆症を用いることとする。蛆とそれが巣食った動物との関連を見ると、特定の蛆が特定の動物に巣食う真性のものと、蛆がたまたま巣食ってしまった偶発性のものとに分けられ、後者のほうが多いとされる¹⁾。この病態は、疾病及び関連保険問題の国際統計分類 (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems : ICD) のコードでは B87 に分類され、蛆がいた部位によって、皮膚蠅蛆症 (B87.0)、創傷部蠅蛆症 (B87.1)、眼蠅蛆症 (B87.2)、鼻咽頭蠅蛆症 (B87.3)、耳蠅蛆症 (B87.4)、その他の部位の蠅蛆症 (B87.8)、蠅蛆症詳細不明 (B87.9) とされている (表1)²⁾。当科で経験した症例は、偶発性の創傷部蠅蛆症と分類できる。

身体に蛆がつく要因は、その個体に因るものと、環境に因るもの、それら2つが重なりあいに因るものに分けられると考えられる。個体に因るものとしては、肥満、免疫疾患、ネグレクトなど蛆がつきやすい個体であることや、幼少・高齢、精神障害、肉体障害などでついている蛆を除去できない個体であることが挙げられる。環境に因るものとして、蛆が生育しやすい環境であったり、蠅や蛆の生育している場所からの隔離が不十分な環境であったりすることが挙げられる。家禽と生活環境が近い場合、蛆が付きやすい状態である¹⁾。個体・環境の双方にまたがる要因としては、劣悪な社会経済状況や戦争状態が挙げられる。当科で経験した症例は、服装や住環境を改善できない自己ネグレクトであること (個体に因るもの)、高齢であること (個体に因るもの)、ゴミ屋敷に住んでいること (環境に因るもの) が挙げられる。これらの要因を取り除かない限り、再び傷に蛆が湧く状態は避けられず、家のゴミを除去したことは環境の改善として極めて有用であると思われるが、その実効性を評価する前に診察を終了しないといけなくなったことは残念で

あった。

蛆を傷の治療に用いるものは、マゴット療法として知られており、1931年に米国の Baer は、傷に蛆がたかっていたにもかかわらず、ひどい炎症をおこさなかった下腿開放骨折の症例を経験し、傷を治すことに蛆を用いる報告が端緒である³⁾。現在では医療用として認可された蛆を創傷治療に用いられている^{4,5)}。しかし、本症例のようににげなく観察した創面に蛆がいたのは驚きの経験であった。このような報告はいくつかあり、北海道においても七戸らが受傷翌日に救急搬送された、特記すべき合併症を持たない頭部挫裂創に無数の蛆が寄生した例を報告している⁶⁻¹¹⁾。社会の変化などさまざまな要因により、このような症例を経験することが増えてくると思われた。

本論文の要旨は、第37回日本臨床皮膚外科学会総会・学術大会 (2019年2月17-18日、於名古屋) で発表した。

(利益相反開示)

本論文と利益相反となる企業などはない。

(お断り)

文献3) とされているものは、文献12) に The Classic として転記されたものである。

文 献

- 1) John DT, Petri WA. Fly larvae that cause myiasis : Markell and Voge's Medical Parasitology. 9th ed. St. Louis : Saunders Elsevier ; 2006 : 328-335.
- 2) B87 Myiasis, ICD-10 Version : 2016 : <https://icd.who.int/browse10/2016/en#/B87> (2019年5月6日)
- 3) Baer WS : The treatment of chronic osteomyelitis with the maggot (larva of the blow fly). J Bone

- Joint Surg Am, 1931 ; 13 : 438-475.
- 4) Stegeman SA, Steenvoorde P : Maggot debridement therapy. Proc Neth Entomol Soc Meet, 2011 ; 22 : 61-66.
- 5) 三井秀也, 川畑拓也, 黒子洋介ほか : Diabetic foot に対するウジムシ治療. 脈管学, 2005 ; 45 : 443-450.
- 6) Yuca K, Caksen H, Sakin YF, et al : Aural myiasis in children and literature review. Tohoku J Exp Med, 2005 ; 206 : 125-130.
- 7) Namazi MR, Fallahzadeh MK : Wound myiasis in a patient with squamous cell carcinoma. The ScientificWorldJournal, 2009 ; 9 : 1192-1193. DOI 10.1100/tsw.2009.138.
- 8) 上村清, 荒川良 : センチニクバエによる鼻ハエ症の 1 例, 衛生動物, 1986 ; 37 : 163-164.
- 9) 末吉昌宏 : 日本で発症した人体ハエ症の再検討, 衛生動物, 2015 ; 66 : 91-120. DOI : 10.7601/mez.66.91.
- 10) 矢崎誠一, 福本宗嗣, 岩永幸夫. 蠅蛆症の一例. 農村医学. 1977 ; 26 : 644-646.
- 11) 七戸龍司, 堀内勝己, 大澤昌之ほか : 無数のハエ幼虫寄生を伴った頭部挫裂創の 1 例. 日形会誌, 2008 ; 28 : 517-520.
- 12) Baer WS : The treatment of chronic osteomyelitis with the maggot (larva of the blow fly), Clin Orthop Relat Res, 2011 ; 469 : 920-944. DOI 10.1007_s11999-010-1416-3.